

● 北 陸

響 敏 也

例えば民族や宗教、さらに国家や言語圏。

どれも文化の芽生えや育成に大きく関り、時にその淵源ですらある。「人類（ヒト）」は古来、往々にして孤独な「生」を営み、環境の風雨に晒されてきた。それを仲間の意識で結び、絆の鮮やかさで繋ぎ、文化と呼ばれる熟成へと導く、言ってみれば「命の連結器」が民族や宗教、国家や言語だ。

しかし現代史の風景で、それら連結器は静いを生む煙源となり、憎しみを発火点まで引き上げ、戦いの狼煙を地球規模で拡大させる悪党になった。宗教も民族も問題の根が深い。

こんな世相であってみれば、ご神託を待つがごとく、中央方向から降臨する調書を待つのでなく、各地域が率先して一歩先んじる視線が必須だ。AIも過熱気味の時代、もはや個が全体を「統べる」余地はなく、それぞれが地域の未来形を企画、発注、生産して、それぞれの出来栄えの違いを「認める（楽しむ）時代」になってきた。だからこそ地域の発する存在感はあらゆる局面で高まっている。

北陸3県の音楽文化が発する視線は、確かに自らの根源を見詰めている。それぞれを代表する名ホールの自主事業に取材してみよう。

高度な合奏能力を持つ国際派の器楽奏者の育成を目指して1995年に創設された《桐朋オーケストラ・アカデミー》の成果でも音楽界に名を馳せる富山市。その音楽文化力の象徴がオーバードホール。こうしたプロ中のプロを育成する過程は、しかしそれほど困難な道じゃない。難しいのは一般社会や家庭など、普段着の場での音楽的な基礎体力の向上。すぐに成果の上からぬ地道な作業だから。

オーバードの取り組みの一例は《オーバード！みんなの吹奏楽大作戦》(2018年3月18日)。吹奏楽の人気集団《東京佼成ウインドオーケストラ(TKWO)》の人気シリーズと連動した企画で、富山独自の趣向も盛り込んだ。1回完全燃焼のコンサートで、富山独自の趣向も盛り込んだ。1回完全燃焼のコンサートもいい。しかし、予感に始まり余韻が尾を引いてこそ、実りへの期待がある。参加型の企画で、現役の生徒も学生も社会人も、参加の垣根はない。楽器を持って集まれば良い。TKWOメンバーに3日間のレッスンを受けてのち本番を迎えるのも一過性の花火で終わらない拡がりがある。地元ダンスグループとの協演など、吹奏楽オタクの垣根もきちんと取っ払い秀逸な企画だ。

福井の名産品のなかで、ひとひねり効いた逸品、果実の甘みと香りだが、栄養分は野菜を超える「越のルビー」。食通に好評だ。そのお洒落プチ・トマトの名を冠した《越のルビー音楽祭》がある。新たな才能発見に預かって力おおい。地域名産の名前が、音楽文化と結びあわせて拡散してゆく。理想形だ。

極めつけはオペラ。2018年10月10日はブルガリア国立歌劇場の引越し公演。ハーモニーホールは純コンサートホール仕様だから、演奏会に特化した会場だ。ところがオペラは芝居の一種だ。背景を描いた吊り物やドラマを効果的に運ぶ舞台機構が必要だ。残響があると声が反響し歌詞が不明瞭、筋すら判らない。しかし演出担当カルターロフは両者の良いとこ取り。コン

サートホールの極上の音質と、劇場ドラマ機構の緊迫感を魔術的に両立、歌劇場未体験の音楽ファンにも、歌劇場を超える体験を届けた。こうした主催公演の多くに《越のルビー》の枠組みが付き、地域イメージ確立と地域先行の手際が光る。

最前線のスタッフが何気なく「曲目が、マニア寄りになったというか、大人になったように思える」と。オーケストラ・アンサンブル金沢(OEK)と音楽堂を熟知した言葉だけに、示唆に富む。集客に超有名曲が必須だった時期に比べると、聴衆の音楽的な感受性や趣味が、常設プロオケのある街に相応しく変化した証と断言してもいい。それは一種の事件だと言える。なぜなら聴衆が変化していくのを感じるなど西洋音楽を構築してきた欧州の都市ですら減多にない現象なのだ。演奏、企画、運営の3要素が完全に噛み合ってきた証と考えられる。確かに、このところのOEKのプログラム・ビルディングには歯ごたえ確かなものが並ぶ。水面下の仕事の成果だ。

演奏面で言えばミンコフスキの矢継ぎ早のアイディアと実行力で、ドビュッシーの歌劇《ペレアスとメリザンド》公演(東京も含む)。

音楽的な総合力を世に問う公演となった。

音楽雑誌の人気投票では国内オケでトップの地位にまで登り詰めている。

金沢ではオーケストラに集中した記事になったが、オーケストラは都市の音楽的な総合力が産み育てるものだ。すべてを語っている。